

「神様の導きと恵み」

昨日、会堂掃除の後、教会誌編纂委員会がありました。田代さんが調査してくださった凡そ 100 年前の古い地図を見ながら、この敦賀教会の前身である 2 つの教会、富貴教会と津内教会の、かつての場所を確認しました。富貴教会と富貴幼稚園は、今の相生町の、ヨーロッパ軒本店が立地するあたりにありました。「長岡屋」という旅館を買い取って教会と幼稚園にしたと記録されています。ちなみに、この「長岡屋」という旅館は、北前船で財をなした田附新助（たづけ・しんすけ）という今の滋賀県出身の商人が建てたらしいとのこと。一方、津内教会は、今の津内 2 丁目と本町 2 丁目の、ちょうど間くらい、海陸運輸の旅行代理店がある場所のちょっと西側にありました。げんでんの大きな駐車場入り口から道を挟んで南側のあたりですね。ちなみに、げんでんの建物があるところには、当時、ソ連領事館が置かれていました。あと、個人的に興味深かったのは、ちょうど、この教会玄関から出て西側、国道 8 号線の方に行きますと、国道との交差点のところに「かくめい」という電器屋さんがあります。100 年前の地図で見ると、この電器屋さん同じ「かくめい」という名前で、八百屋さんをしておられたようです。100 年の歴史の中で、大幅な事業転換をされたんだなと思わされます。そして、ここ、今の敦賀教会があるところは、県立敦賀高等女学校の敷地内でした。

ところで、今のげんでんの駐車場と敦賀信用金庫本店が並んでいる場所の 100 年前の様子は言うところ、書店、下駄屋、魚屋、ミシン店、パン屋、酒屋、八百屋、呉服屋、自転車屋などが、並んでいました。それぞれのお店が、戦中戦後を経て、移転先を見つけ今なお事業を継続しているのか。それとも、戦災によって廃業されたのか。そこには一つ一つドラマのような展開があったのだろうと

想像します。と同時に、100年後、今、私たちが礼拝しているこの場所がコインパーキングとかスーパーとかになっていて欲しくないな、とも思ってしまいました。たとえ山や丘が揺らいでも、神様が導かれた教会の歴史が、今後も絶えることなく続くようにと願うばかりです。

年を重ね、衰えを感じ、色々なことを手放さざるを得ない時。あるいは、社会の大きなうねりや時代の激しい流れの中で、色々なことを諦めざるを得ない時。きっと、私たちは空しい気持ちになるのだと思います。自分が一生懸命にしてきたこと、多大な時間と手間を割いて取り組んできたこと。そんな掛け替えのない私の実績・功績から、自分の意に反して遠のいていってしまうこと。それってつらいことです。今日の聖書箇所において、知恵の深いコヘレトも、そのことを嘆き、空しさを感じています。

「太陽の下でしたこの労苦の結果を、わたしはすべていとう。後を継ぐ者に残すだけなのだから」。「後を継ぐ者」がいるなら、それで良いじゃないか、と思う反面、後を継がれても困るという場合もありますよね。例えば、分かり易いのは家族、ですね。それこそ掛け替えのない存在として、お互いに愛し合い、慈しみ合っていた間柄に、「後を継ぐ者」が現れたら、それはそれで、きっと大きな葛藤を生み出すでしょう。「私」だけが、その立場に相応しいはずだと思っていたのに、「後を継ぐ者」が現れる、現れる余地がある、ということの残酷さ。

何か大事なものを守りたいと強く願えばこそ、「後を継ぐ者」がいるということは、つまり「私の代わり」が存在するという悲しいに変わります。「私の代わり」が存在するなら、じゃあ、私が、今までに味わってきた労苦は何だったのか。別に私が、忍耐して労苦を味わったり、被ったりする必要はなかったじゃないか。他の人がすれば良かったじゃないか、という風に考えることもできます。「これを任されるのは私しかしない」と信じたから、踏ん張り、無理も利き、やり遂げることができたのに、実は、「私の代わり」は、すでに用意されており、私が築き上げてきたものを受け

継ごうと待っている。「太陽の下、労苦してきたことのすべてに、わたしの心は絶望していった。

知恵と知識と才能を尽くして労苦した結果を、まったく労苦しなかった者に遺産として与えなければならぬのか。これまた空しく大いに不幸なことだ」。

コヘレトの言葉というのは、全体的に私たちの常識や良識に挑んで来るような、鋭い言葉のオンパレードです。「頑張ったって意味ないよ」とか「善人になっても良い事ないよ」とか、ですね。おおよそ聖書には似つかわしくない絶望に偏った考え方で満たされており、この世の空しさをずっと見つめ続けているような書物です。ただ、一方で、その「空しさ」とは、「人の目から見た空しさ」であることは重要です。あれや、これやと期待し、希望し、別にそれ自体は悪い事ではないですが、ただ神様の御計画とは異なる夢を、私たちが頑なに持ち続けてしまう時、神様の恵みに支配されたこの世界に「空しさ」という穴がぽっかりと開いてしまいます。イザヤ書 55 章 8～9 節にも、こんな御言葉があります。「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている」。私たちが、どんなに高尚な期待をしようと、当然と思われる希望を抱こうと、称賛されるべき夢を見ようと、でも、それらは神様の思いや道には、到底及ばない。志の高さも長さも、神様の方がずっと上回っています。

私たちは、「私に出来ること」という尺度で、期待したり、希望したり、夢を見たりします。例えば、宇宙飛行士になることを夢見る人はいますが、生きたまま宇宙の果てに辿り着きたいと願う人はいません。そんなの「私に出来ること」と言うか、「人間に出来ること」の範疇を大きく超えているからです。このコヘレトの言葉の著者も、「私に出来ること」の枠組みに収まる部分で、「知恵と知識と才能を尽くして労苦」しました。そして、同じ枠組みの中で最良の結果を得られるよう願いました。でも、この著者が定めた枠組みは、神様の壮大な、遠大な御計画にあって、非常に小さ

な枠組みでしかありませんでした。だから、この著者が生きて楽しめる間に、本人が納得できるような恵みは与えられませんでした。結果、「一生、人の務めは痛みと悩み。夜も心は休まらない。これまた、実に空しいことだ」という、究極の徒労感を、この著者は受け取ることになりました。まあ、このコヘレトの言葉の著者が、そもそも欲張り過ぎだなんだよ、と解釈することはできますけどね。でも、参考にしたいのは、「私に出来ること」の限界と、「神様がお考えのこと」の着地点は、一致しない、ということです。私が非常に労苦した結果を、私が受け取れるとは限らない。神様の思いは、私たちの思いをはるかに高く超えている。出エジプトを導いたモーセさんも、そうでしたね。あれだけ、民衆から突き上げられ、その度に、神様に代表して謝罪し、叱られ、どうにかこうにか、荒れ野の40年を耐えきった挙句、約束の地シオンには入ることが出来なかった。ヨシュアに、その役目を譲るほかなかった。それが、神様の御計画というものです。

だから、今日の聖書箇所 24～25 節にあるような「弁え」が必要なのだと思います。「人間にとって最も良いのは、飲み食いし、自分の労苦によって魂を満足させること。しかしそれも、わたしの見たところでは神の手からいただくもの。自分で食べて、自分で味わえ」。自分が成してきたことの最終結果を期待するのではなく、そのために労苦した、その時々と与えられる小さなご褒美に満足すること。自分で食べることのできる恵みと、自分で味わうことのできる幸いに気付き、感謝すること。それが、永遠には生きられない私たちの「分」であると言えます。

ただ、1 点だけ。このコヘレトの言葉の著者が、全く想像すらしなかったであろう、神様の嬉しい御計画がありました。それは、「まさか、自分の書いたものが、聖書になってその後 2200 年も読み継がれているなんて」という真実ですね。この著者が憂いでいたのは、自分の死後、自分が経験した労苦や功績が他者の取り分となり、自分の手元から離れていくことでした。しかし、実際は、どうか。この著者は、生きた御言葉である聖書の中で、今なお「全て空しい」という、彼自身が発

見たこの世の真理を発信し続けています。彼の労苦は、まあ、彼自身が望んだ形ではなかったにせよ、聖書に収録されるという形で、十分に報われていると言えないでしょうか。コヘレトの言葉は、未だに熱を帯び、鮮やかな気付きを私たちに与えています。彼の知恵や知識は、彼自身の言葉としてこの現代世界に響いているわけです。それは、彼自身も想像しなかった、神様の恵み豊かな御計画と言えるでしょう。

つまり、神様のなさることって、そういうことなんですよ。自分が考えている間には、悩んでいる間には、全然見えてこないけれど、でも、神様は神様なりにお考えになり、私たちの言葉や行動に、ちゃんと意味と価値を与えてくださる。無駄になってしまったと思えるような実績にも、しっかり光を当てて見出してくださる。割れた器で何の役にも立たないと思いついていても、いつか十分に用いられ、感謝が注がれる器にしてくださる。それが神様のなさる業です。だから、「むくいを望まで、人に与えよ、こは主のとうとき、みむねならずや」。「浅きころもて、ことをはからず、みむねのまにまに、ひたすら励め」。大丈夫、ちゃんと神様は見てくださいます。イエス様は励まし、支えてくださいます。人の目には空しく映るものでも、神様は他の捉え方をなさいます。もし本当に空しいとしても、であれば、その空しさに意味を与えるのが神様です。コヘレトの言葉の「空しい」には、全く空しくない重要なメッセージが込められています。私たちの人生に気付きを与える重要なメッセージです。そんな風にして、私たちの空しいと思える言葉も働きも、主の御名によって、十分に活かされていきます。

だから、まずは自分という枠組みを超えて、神様の御計画を尋ね求めること、イエス様のお働きに委ねてみることに。「手放すことで、却って豊かに受け取れる」と信じるのは、我々キリスト教の真骨頂ですよ。今週も、空しさ憶える心があるなら、そこに神様とイエス様をお迎えして、歩んで参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も、何の功もない私たちを、ただ憐れみによって招き、この礼拝堂に集わせてくださったことを感謝致します。昨日までの一週間を思い起こし、時に空しさを感じるような出来事があったことを告白します。自分の努力に対して、思いに対して、働きに対して、あまりにも少ない顧みしか無かったと正直に感じることもありました。自分の願いや祈りが、まだ届いていないと残念に思う瞬間もありました。しかし、神様。今改めて、あなたには、あなたのお考えがあり、私たちの期待を大きく超えて、豊かに祝福してくださるご用意があることを、私たちは信じます。どうか、この礼拝を経て、再び心新たに1週間の歩みを踏み出そうとする私たち一人ひとりのことを、片時も見失わず、常に支え、励ましていてください。空しさ憶える私たちの心を、どうか、あなたの御言葉とキリストの恵みとで満たしてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

8月召天者を憶える祈り

聖書朗読 ヨハネの黙示録7章13～17節

すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通過して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕える。玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る。彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも、彼らを襲うことはない。玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれるからである。」

山口サキ姉	やまぐち さぎ し	(1974年8月1日)
笹本純一郎兄	ささもと じゅんいちろう けい	(1937年8月11日)
山口寅雄兄	やまぐち とらお けい	(1975年8月13日)
橋本 操姉	はしもと みさお し	(2022年8月21日)
柴田キヌ姉	しばた きぬ し	(1951年8月21日)
寺島達夫兄	てらしま たつお けい	(2003年8月23日)
松木ひで姉	まつぎ ひで し	(2002年8月29日)

8月召天者を憶える祈り

神様。私たちは今、来る8月に天へと帰って行かれた方々を憶えて祈りを合わせています。私たちの心の内には、天上で和やかに過ごされているであろう親しい方のお顔が浮かびます。今生の別れを経験して尚、あなたの下における親しい方々との再会の約束があることを感謝致します。天にあって、地にあって、あなたは私たちをひとつにしてください。8月はここ日本にあって、この世界の平和を、特に心に留めるべきひと月でもあります。先に召された方々から、この世での務めを受け継いだ私たちは、世界の平和を実現するという尊い業をも継承致しました。たとえ、その実現が困難だとしても、平和の使者としての歩みを全うすることができるように、私たちの日々の信仰を支え導いてください。

天の上には永久の平安がありますように。そして、地の上には豊かな慰めと、平和へと至る道筋をお与えください。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。